

精霊流し

お盆が近づくにつれ、厳しい暑さの中にも朝夕にわずかな秋の気配が感じられ、青空の下で力強く鳴いていた蟬の声も、少しずつ落ち着きを見せ始めます。そして夕暮れが近づくころ、今年も長崎の夏を象徴する「精霊流し」の日を迎えました。今回は、今年の我が家の精霊流しについて、紹介します。

今年、わが家のペットが17年の生涯を終えました。

子どもたちがまだ小さかった頃に家族の一員として迎え入れたその犬は、子どもたちの成長のそばにいつも存在していました。嬉しいときも、悲しいときも、何気ない日常の中でも、当たり前のように寄り添ってくれる存在でした。

お盆が近づいてきたころ、「ランディ（犬の名前）の精霊船を流したいね」と誰かが言った言葉をきっかけに、家族みんなで精霊船を作ることになりました。

段ボールに百元ショップの木目柄シートを貼っていき、見様見真似で形を作っていました。船首にはよく遊んでいた犬のぬいぐるみを飾り、犬用の精霊船だとアピールもしてみました。帰省した子どもたちも作業を手伝いながら、家族みんなで「こんなこともあったね」「あのときは笑ったね」と、自然と思い出話に花が咲きました。

八月十五日、完成した精霊船を家族みんなで抱え、松山町の流し場まで歩きました。ぬいぐるみに気付いた人が「ワンちゃんだ」「かわいい」と声を掛けてくれます。そんな周りの反応を見て、「散歩してたときも同じように言われてたね」と家族で笑い合いました。

流し場に着き、船を置いて離れるときになって、本当にこれでお別れだなあと、しみじみ考えてしまいましたが、今回、精霊船を流したことは本当にいい思い出になりました。

私たちは日々、忙しさの中で過ごしていますが、精霊流しの時期になると、家族や故郷、そして共に過ごした方々のことを改めて思い返します。大切な方を失った悲しみは簡単に消えるものではありませんが、思い出を語り合い、その存在を心に生かし続けることが大切なことだと今回改めて感じることができました。



(堀)

